

「宗論はどちら負けても釈迦の恥」

おやまと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

宗門に囚われぬ柳宗悦の見地

仏教には教相判釈（教判）と呼ばれるものがある。これは、さまざまな經典を、その教説の内容や様式から分類して価値づけすることを指す。種々様々な仏教經典がインドから次々と入ってくる中、中国仏教においてこの教相判釈が行われ、さまざまな宗派・学派が成立していった。

今日、浄土系各宗派の源になる浄土教も、中国において5～7世紀にかけて確立した宗門である。これが日本に導入され、平安時代に浄土信仰として隆盛を見たあと、鎌倉時代に入った時、法然が登場して専修念佛の教えを説き、ここに浄土宗が成立する。法然の説いた教えはその後、多くの流れに分派したが、今日まで続いている主な宗派としては、法然自身を宗祖とする浄土宗、親鸞を宗祖とする浄土真宗、そして一遍を宗祖とする時宗がある。

これら浄土系の宗派は、いずれも同じ浄土三部經を所拠の經典にしている。ところが、浄土宗では、あえて別派を立てたとして浄土真宗を苦々しく思い、浄土真宗は己の教えこそより徹底した他力の教えだとして浄土宗を軽んじる傾向がある。一方、時宗ははるかに小規模な宗派であり、同じ浄土宗門として顧慮されることはきわめて少ない。

しかし、浄土宗門に属さない立場からすれば、これら各宗派の区別や、ましてその対立などに囚われる必要はさらさらない。むしろ、どれも同じ他力の易行道なのだから、各宗派の宗祖の思想をそれぞれに生かしつつ、より統合的に浄土の教えを捉えることができるのではないか。こうした発想に気がついていた人物の一人が、我が國の民芸学の創始者として知られる柳宗悦（むねよし）（1889-1961）であった。

柳によれば、様々な仏法の中から庶民救済のために専修念佛を選んだのが法然であり、その他本願の信仰の側面に力点を置いたのが親鸞、さらに仏と衆生の差異を止揚するほどまでにこの境地を徹底させたのが一遍だと位置付けられるという。そして、法然、親鸞、一遍の三者はむしろ一者の内面的発展のそれぞれの過程であり、三人ではあるが一人格の表現である。この三祖師あるがゆえに、浄土思想に絶大な価値が現われたのである。

その古典的名著『南無阿弥陀仏』（岩波文庫）で、柳はこの三者の関係性の様態を、「法然という礎の上に、親鸞の柱、一遍の棟が建てられているので、法然なくしては親鸞も一遍もなく、また親鸞、一遍なくして法然もその存在の意味が弱まる」と述べている。しかも浄土宗門が一遍の境地にまで達した時、自らと対立的なものと考えられていた聖道門に接近して、そこに他力と自力、易行と難行との相違も解消され、一つの仏教として大きな円環の中に融解していくとされるのである。これは、なんと心を晴れやかに解き放つ見方であろうか。柳宗悦は浄土宗門に属する者ではない。だからこそ、宗派に囚われぬ自由な見方ができたのである。

レッシングの『賢人ナータン』

俗に「宗論はどちら負けても釈迦の恥」という。これは仏教内部の教義論争や対立の愚を戒めた川柳で、法華宗（日蓮宗）

と浄土宗の仲の悪さを揶揄するときに述べられることが多い。どんなに宗門が異なると、釈迦を始祖とする同じ仏教ではないか。宗門同士で互いに優劣の論争を行い、どちらが勝ち、どちらが負けたところで、釈迦は恥じ入らざるをえないというわけだ。まして同じ浄土宗門内部の宗派で対立して仲違いしてしまうのは、もっと愚かなことである。

この考えはさらに進んで、異なる宗教と宗教の間にも言えることではないだろうか。それぞれの宗教には、その宗教でなくてはならぬ絶対に譲れない価値が存するのであろうが、それはどこまでもその宗教の側の都合に過ぎない。宗教同士が信仰や教義や儀礼など、その絶対性を振りかざし、優劣をめぐって闘争し、信者を取り合い、反対者に呪詛をぶつけ、我こそはお山の大将だと嘯いている姿は、傍目には滑稽と忌避の念を与えるばかりで、宗教全体に対する評価を大きく下げる結果になってしまう。教えは相互に異なっても、宗教と名のつくもの同士ではないか。仲良く平和に共存していけば、どの宗教も人々から愛され頼りにされ、共に繁栄していくはずである。

この点で大いに参考になるのが、18世紀ドイツの劇作家G·E·レッシング（1729-1781）の戯曲『賢人ナータン』（岩波文庫）である。この中に有名な「三つの指輪」の話がある。

その昔、東方の国のある金持ちが、その持ち主は神にも人も愛されるという秘密の力のある指輪を所有していた。彼はそれを三人の息子にゆずりたいと思っていたが、あいにく指輪は一つしかない。そこで本物そっくりの精巧な指輪を二つ作り、亡くなる前、息子たちを一人ずつ呼び出して、これが秘密の指輪だとして分かち与えた。息子たちは、自分こそ本物をもらったと言って言い張るが、あまりに精巧に作られていて、専門家が鑑定しても区別がつかない。そこで息子たちは裁判所に訴えた。もちろん裁判官にもどれが本物か分からない。

しかし、この裁判官こそは賢者だった。彼は言った。「その指輪を持っている人間は、神からも人からも愛されるというではないか。それなら、お前たちの内で神からも人からも愛される者がいるならば、その者の指輪こそが本物になる。だから、お前たちもそれぞれ自分の指輪こそ本物だと信じ、神からも人からも愛されるように努め励むがよい。」これは、なんと深い含蓄があり、知恵に満ちた言い方であろうか。

この三兄弟とはユダヤ教、キリスト教、イスラム教の喻えであり、いずれも父なる神を信じる同じセム系一神教というルーツを持つ。現実の歴史においては、この三つの宗教ほどお互いに仲の悪い宗教はない。そのために、これらの一神教の宗教は、人々から疎んじられ忌避される原因を自ら作り出していたのである。

どの宗派、どの宗門であれ、さらにはどの宗教であれ、人々の幸福と平和、繁栄を目指している教えを説いている。だとすれば、それらが人々にも神（あるいは仏）にも愛されるためになすべきことはただ一つ、自らの宗派、宗門、宗教のエゴイズムから己を解放し、その教え通りに無私の精神で、世界のあらゆる病める人々、難渋に苦しむすべての衆生に献身していくことに尽きる。